

平成22年3月期第3四半期決算説明会Q&A

Q: 受注は回復してきていると見て良いか？

A: 顧客の設備投資抑制が続いており、2007年度の受注高の水準から比較すると、まだまだ低いレベルであり、回復傾向とはいええない状況である。

Q: LTE用計測器の進捗および来期のLTEの売上見通しはどうか？

計画通りの推移となっている。
欧米や韓国のチップセットベンダーや端末ベンダーから受注を獲得している。今後も海外ベンダーからの引き合いが増加するものと期待している。
A: 2010年は、各国通信事業者のLTE商用化も控えており、チップセットと端末の開発が本格化する。今期よりは規模が拡大すると期待しているが、LTEの消費者への浸透には時間が掛かると思われ、計測需要も中期的に着実なペースで高まっていくと想定している。

Q: 半導体市場や部品市場は回復してきている。汎用計測等での売上回復はあるか？

汎用計測器は、生産設備の増設時に需要がある。電子部品市場の生産は回復傾向にあるが、保有している生産設備を増設するほどではなさそうであるので、汎用計測器の売上の回復は、来期前半までは厳しいと考える。しかし、新製品を積極的に投入しており、設備投資の回復時には計測需要を確実にとらえていく。

Q: 汎用計測は競争が厳しいが、どのようにして市場を獲得していくのか？

製品の差別化(ミドルレンジで低価格な計測器、個別機能など)、サポート体制の強化により、シェアの拡大が可能である。特に、日本やアジアでは、地の利も活かせると考えている。Q3から1月に向け無線用部品向けなどを対象としたミドルレンジのスペアナ、高速計測の光スペアナ、各通信方式へのソフトウェアオプションなどの新製品を順次投入し市場を獲得していく。

Q: 新製品の受注、売上状況はどうか？

LTE関連の計測器は堅調に推移している。また、TD-SCDMAなどへの対応機種についても底堅い需要はある。今期後半に市場投入した光スペアナや高速信号品質測定などは、通信速度の高速化にともない需要が顕在化しており、引き合いは順調な滑り出しである。

Q: 日本市場は厳しそうだが、来期はどうか？

日本の景気回復は世界的に遅れているといわれており、顧客の設備投資抑制は継続して日本市場は厳しそうだが、来期はどうか？
A: 日本の製造業は、国内からアジアへシフトしつつある。アンリツも顧客やマーケットの変化を的確に捉えながら、アジア展開をさらに推し進め、事業運営を行っていきたい。

Q: 第4四半期と来期の見通しは？

顧客の設備投資抑制は継続しているものの、第3四半期までは計画通りの進捗となっている。景気の下振れリスクや急激な為替変動リスクなど不透明な部分もあるが、現状では第4四半期も計画通り進捗すると考えている。営業利益については、各事業セグメントでの下振れリスクも想定できることから、変更していない。
A: 来期については、これから経営計画を作成する段階であり、現時点では明確になっていない。LTEや中国3Gなどで計測需要の増加が見込める領域では、シェア拡大を取り組みたい。既存のビジネスでは、顧客の設備投資抑制は継続している。来期後半には設備投資抑制の緩和と、それに伴う計測需要の回復を期待したい。